

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	蜻蛉日記の研究：作者の精神展開について
Author(s)	豊田, 光恵
Citation	茨城大学国語国文学(16): 28-33
Issue Date	1967
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/8306">http://hdl.handle.net/10109/8306</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

# 蜻蛉日記の研究

作者の精神展開について

豊田光恵

作者を考へるとき、まず念頭に浮かぶものは、この一作者が延喜時代と、寛弘時代との楔をなしている天曆時代を代表する位置にあるという事である。すなわち彼女の生まれ出た時代に貫之や伊勢が没して行つたわけで、なお實夷ではあるが未熟さの残されていた時代精神に文化として満足しきれないものがそこに多かつた。ここに天曆の文化が成長し始めた。彼女はその青春の時代において、不足なくその形成されようとする文化の空気を吸い得たわけである。彼女の二十五、六才頃に生を享けてゐる枕草子の作者清少納言や、彼女の三十六七才頃、産声をあげただろうと思われる源氏物語の作者紫式部とはこの点、すでに生の発足を別にしてゐるのである。「蜻蛉日記」に見える作者の人間像を考へるときこれら文芸的地位を度外視しては到底不可能である。

今、全体の構成を概観してみると、上巻には、天曆八

年初夏、藤原兼家が求婚してきて八月結婚する。十月には父倫寧が陸奥守になつて赴任する。翌九年には道綱が生まれる。その後兼家が町の小路の女と関係し、彼女の苦惱が始まる。康保元年初秋には実母の死にあり。その前後兼家との交情が親密に復するが、康保四年、冷泉天皇の即位がなされると、彼は新帝の蔵人頭左近衛中将、従三位に陞り、道綱母を本邸近くに移転させ、彼女としては、最も得意の時代を迎える。翌十年には、兼家の本室藤原中正女の時姫と町の小路の女に対して共同戦線をはる。天徳二年には町の小路の女が男子を産み、道綱母はますます苦惱するが、翌年その子が死に、兼家の寵も衰えたので、作者はほっとする。安和元年には、強情を張つて初瀬詣をし、帰途兼家の出迎を受け、意気揚々と帰京する。中巻には安和二年の左大臣高明の左遷や、自分の重病、道綱が内裏の賭弓に勝つたこと、それから兼

家が藤原国章の女の近江に關係したために彼女が苦惱し、唐崎の破えや石山寺詣をし更に天祿二年四月から長精進し、六月には鳴滝にこもる。しかし兼家に強引に連れ戻され、「あまがへる」というあだ名をつけられる。それから七月末に父と初瀬詣をすることなど。下巻には、齡のせいで、彼女も心境が落ちついて来、兼家が旧情人に産ませた女子を引き取って養い、広幡中川に隠棲し、兼家の訪れは絶えたこと、右馬助に任官した道綱の縁談に心を勞したこと、その叔父で士官の遠度が養女に執拗に求婚して来たのを彼の不品行がわかったので破談にしたこと。また突然太政大臣兼通が作者に求愛して来たのを彼女自身はねつけたことや、道綱が賀茂臨時祭の舞人にされ、当日彼女の父の倫寧が上達部たちらやほやされているのをみてうれしく思ったことなどを記している。松田成徳氏は、昭和二十六年九月号の『日本文学研究』に道綱母の心の移り変わりを「もののはかなし」から「もののはれ」へと高められたと述べておられる。この「もののはれ」はすなわち、『源氏物語』の「もののはれ」の世界を構成する重要な基盤たりえたとも、また、その要素あるいは条件の一つになっているとも述べられている。私は、ここで、彼女の精神的転機をもたらし、その事件を拾い上げ、その中に表出される人間像を見つ

けてみたい。兼家故の作者の人間の苦惱、そしてそれを通りぬけたのちの静かな安息、彼女自ら言うところの、「かげろふ的生涯」を生きた作者を理解していきたい。

さて、作者道綱母と兼家の關係が始まった天曆八年よりこの日記の筆は起こされ、天延二年において、中絶の形に終わっているのであるが、その間二、三年叙事の欠けているのみで（天徳二、三年頃）、そのすべてに多少ながらも兼家との關係の叙せられていない年代とてはない。

まめ反かよひかよひて、いかなるあし  
たかありけむ

ゆふぐれのながれくるまをまつほどに  
涙おもひのかはとこそなれ  
かへし

おもふことおもひのかはのゆふぐれは  
こころにもあらずなれこそすれ

これら、後朝の贈答歌を区切りにして、倫寧女は花恥ずかしい十八才の年に兼家の妻妾と定まったが、これは同時に彼女にとって理想の破却であり、現実苦に踏入る序幕であった。すなわち、兼家にはすでに正室があったのみならずその翌年、倫寧女の身二つになる頃には、兼家は第三の女国章女に愛を移していたし、彼女は三妻維と

嘲笑されることすら堪し忍ばねばならなかった。日記中に兼家のことをたびたび「例の物思ひは云々」と述べているが、ついにこの一男性は果敢に一女性の終生を買く懊悩の源となり、現実生活の破綻の導火となったのである。兼家の心理を考へるに、いかにも彼は多情ではあったが、道綱母に対し、全然愛を失ったのではなかったらし。

前栽の花、いろいろにさきみだれたる  
を見やりて、ふしながら、かくぞいはる  
る。かたみにうらむるさまのことどもあ  
るべし

もくくさにみだれてみゆる花のいろは  
おく白露のわくにやあるらん  
とうちいひたれば、かくいふ。

身の秋をおもひみだるる花の上に内の  
ころろはいへばさらなり  
などいひて、れいのつれになり、ふせり

(天徳元年)

というよりな怨情が積もり積もって醜い口争いをするこ  
ともあったが、彼女が慈母を喪つて悲嘆にくれている時  
は彼もまたその穢をも忘れて、共に涙する程の半面情味  
のある男であった。

人きゝつけて、ものしたり。

われはものおぼえねば、しりもしら  
れず、人ぞあひて、「しかじかなん、も  
のしたまひつる」とかたれば、うち泣き  
て、けがらひも思ひまじきさまにありけ  
れば、「いとびむなかるべし」などもの  
して、立ちながらなん。そのほどのあり  
さまはしも、いとあはれに、心ざしある  
やうに見えけり。  
(康保元年)

と、こりした真情は、さすがに彼女の心を動かさずには  
おかなかつた。

実権は兄をしのぎ、やがては従兄の位置を奪い、わが  
女を入内せしめて太政大臣の極官に昇つたほどの兼家で  
あるから、権謀術策にかけて非凡の特異な才幹を持つて  
いたことはいうまでもないが、この敏腕は、いわゆる異  
性の心を狩る上の巧妙姦智であつた。その術策は、一念  
に男性の真情を頼ろうとする女性にとって、堪えられな  
い苦痛となるのであつた。彼女の兼家への愛は、兼家の  
飄逸磊落な性格と全然裏腹なものであつて、一夫を守る  
愛着、一子に対する情愛に全身を献げ尽くしているもの  
のように見られる。「ただこの働き人の上をむいみじく  
覚え侍る」といひ、子のためには、「つねに行かぬこゝ

ちもあはれにうれしう覚ゆること限りなく」とも、また、「憂き身かど覚えず」とも身にしみて感ずる母性愛は、彼女においていかにもと思われるが、兼家に対し求めるところは、環境から見えていくぶん我執的独占の欲求に過ぎていくように思われたいでもない。兼家が、愛を他の女に移すに及んで、彼女の神経はいよいよ病的に尖って行った。

かくてたえたるほど、わが家は、内裏

よりまいりまかつるみらにしもあれば、

夜中あか月とうちしはぶきて、うちわた

るも、きかじとおもへども、うちとけた

るいもねられず、夜長うしてねぶること

なければ、さななりとみきく心らはなに

にかは似たる。

(天曆十年)

ふりかえって、その時代を貫く彼女の心境をうかがうと、それは終始、我執の心と、超我の望みとの激しいもつれ、たゆみない内的闘争であった。しかも彼女は日録の中にそうした己が心境を凝視しつつ、ひたすら人生の第一義にふれていくことを努めている。たとえば、源高明の左遷された事実については、駭きを抱きつつ、教行にわたってその事を叙して、

身の上をのみする日記には入るまじき  
ことなれども、かなしと思ひ入りしも、  
たれならねば記しておくなり。

(安和二年)

と説明を加えている。奇しきわが運命を如実に記し、われと等しい境遇にあらざるも、そうした運命に立たんとする世の多くの女性の心にある暗示たらしめようという主意から、こうした思慮も生まれ出てきたものと思われる。自己凝視の程度は、漸次深まって、「あぢきなき」「つれづれ」の気持ちに沈潜して行くのだった。そこにさらに、御仏の力が欣求されて行く。最初の初瀬詣(安和元年)石山詣(天曆元年)等の一時的の祈念的要求はさすがに、悲壮の感じをも伴って、そこに彼女の微細な神経力の鋭敏な反応がうかがわれる。

ともあれ、狂暴に近い主観の燃焼は、やがて反動的にそのおちつきを見いださずにはいない。総じて下巻すなわら、天祿三年以後の彼女の心理には、そうした伸長と展開とが、著しい。夫の心を占有しようとした我執我欲激しく、それも自分にはどうしようもできない情炎のまゝに身も心も焼き尽くした愛欲―彼女はそうした餓鬼道の底から、やがて、平和な光明のたえた世界へ導かれ出るのであった。

今年も、心ちよげならむ所のせまほしげなるわざにぞ見えける。

(天徳三年)

というよる望みも、最初こそある反逆精神からのみ企てられたかもしれないが、いつか平靜な気持ちで天然自然を賞美する心境にまで誘われて行った。下巻はいかにも、「憂きもつらきも、共に心ち晴れておぼえ」かつは「天が下に、にくき人ありとも、思ひなほらしなどしめて思ふ」心やすさに書き始められているが、それもいよいよ順潮穏やかな流れを結んでゆくのであった。兼家はその年、大納言に昇進した。知人で彼女へも喜びを送り来る者もあったが、彼女はすでにそうした問題にかかわりあうにはあまりに自らを知り過ぎていた。

かゝれど、今はものもおぼえずなりたれば、ななかかいて心安くて、よるも裏もなううち臥して寝る。

というよるな気持ちにまでなり到った。その頃彼女は、兼家の愛妾の腹にできた一人の娘を貰い取って養女にしたが、こうしたところにも、彼女の心に育む余裕さの程がうかがえる。わが生命感を味わって行くよるな態度、兼家の心を顧みず、中川へ宿りに移しても、山ちかり、河原かたかげなるところに

水は心のほしきにいらたれば、いとあはれなるすまひとおぼゆ。

(天延元年 九七三年)

と、安んぜられるよるな気持ち、そうした近情は、あの焦燥の心によつてのみいた数年前の心と比較して、何ほどの差のみえることであろうか。

もちろん、作者三十七・八才(天延二年)で中絶されている現伝の『蜻蛉日記』は、その終りまで、出離現世の彼女や、転迷開悟の彼女を見せてはくれない。初老にさし迫りながら、なお、煩惱の余蘊は、容易に彼女から消滅して行きはしなかった。たとえば、あきらめの底に徹したかのように見られた天延元年の頃であったが

柱によりたちて、おもはぬ山なくおもひたてれば、八月よりたえにし人、はかなくて、むつきにぞなりぬるかしとおぼゆるまゝに、涙ぞさくりもよゝにこぼる。さて、

もろこゑになくべきものをうぐひすはむつきともまだしらずやありけむとおぼえたり。

という記事がある。ここにかえて彼女の人間性が感じられるのである。それから、異母弟の遠度が養女に恋慕

する経緯があり、統いて、道綱が初恋を知るくだりがある。かつては、兼家中心にのみ揺いでいた彼女の心も今や養女や実子の上に多くかかわりあってくる。もっともこれらの心の移り変わりすらも、見方によっては「あるかなさかの心ちするかげるふ」的变化にすぎないといえるかもしれない。しかし、現実生活の破綻に立出したこの一人生の荊路は、ただ同一円周を迂回していたものではない。すでに、上、中、下巻の三変遷すらも、おのずから、彼女の精神の深化の路程を語ってくれる。彼女はそうした人生記録において、体験と自然の生活の一面を遂げている。この点において、この『蜻蛉日記』は王朝における愛欲の文学の屈指たる価値を失ってはいないのである。

いわゆる母性愛というものも、今までは愛情の対象として兼家に対して持っていたものの、いわばあの敗北の後にあつての代償的行動としての結果であると思われるが、そのもの悲しいあり方を意味あるものとして受けとめたい。ここでそれを彼女の愛情の諦念であるとしてもさしつかえはあるまい。この諦念こそ、彼女の心的成長の現われなのである。

すでに述べたが、上巻の世界は「はかなきもの」として記されている。それに対し、中巻の体験を経た作者が

それをさらに下巻で深化させ、「もののあはれ」の世界にまで高めているのである。『蜻蛉日記』が文芸作品として美につながるのは、作者が己が「身の上」を「ものはかなし」と感じたときであるともいえる。この日記の主要指標とみられた「ものはかなし」が、人間性の根本であつたといっても過言ではない。

われわれは、彼女の晩年を（日記は三十七、八才頃までの記録）詳しく知りえないことを惜しむが、この閑寂境に到らしめたものは、自然であつた。作者の自然への愛は、人間に対する作者の深い愛と同じく、生命であつたのである。私は、作者の人間像が、より明白に認められたようすがすがしさを、ここに感じるのである。

